

文学部生のリアルな！ 学生生活

Vol. 46

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。



スポーツであふれた 生活を送る日々

文学部人文社会科学学部のバスポートプログラムスポーツ文化系
私立東京都市大学等々力高等学校（東京都）出身

小野 祐司おの ゆうじ

私がスポーツ観戦に興味を持ったのは、小学2年生の時にさかのぼる。当時、沖縄県に住んでいた私は、テレビに映る興南高校の島袋投手に釘付けになっていた。春に行われたセンバツと夏の全国大会で優勝し県勢初の春夏連覇を果たした興南高校に、沖縄中の人が盛り上がり熱狂する姿を見て、子どもながらもスポーツのすごさを実感し、そこからスポーツ観戦が趣味になっていった。奇しくもスポーツを好きになるきっかけを与えてくれた島袋洋奨さん（平成27年卒）と同じ中央大学に進学し、今はスポーツに関することを学び、部活動では中大スポーツ新聞部に入学し日々中大生の活躍を追う生活を送っている。

中大スポーツ新聞部での活動は毎日貴重な経験の連続で、日々刺激を受けている。年始に行われ中大が2位と大躍進した箱根駅伝の沿道取材や、2021年埼玉西武ライオンズに入団した古賀悠斗選手（令和4年卒）の指名挨拶会見、

2022年度に阪神に入団した森下翔太選手、ヤクルトに入団した北村恵吾選手のドラフト指名直後の会見、今年からプロの選手として活躍する卓球部の小野寺翔平選手取材など挙げればきりがながい。大学入学前にはまったく想像できなかった経験が、取材に加えて、私たちは新聞の作成も学生だけで行っており、年に6回スポーツ紙の紙面を実際に一から作り上げている。紙面の作成は難しく時間もものすごくかかる仕事だが、自分たちが取材をして仕入れた情報を新聞という形にし、中大生の活躍を世間に発信する数少ない機会なのでいつも以上に力が入る。私たち中大スポーツ新聞部が作成した新聞は各学部事務室前に加え、発行直後には学内で手配りも行っているの、是非手に取って読んでみてほしい。

もちろん部の活動は楽しいことばかりではなく、悩むこともあれば辛いなど感じることもある。しかし、それ以上の達

成感とやりがいがあり、何よりもスポーツが好きで私にとって、自分と同じ大学に通う選手がさまざまな大会で活躍する姿を見るのはまるで自分のことのようにうれしい。これまで部活動が盛んではない学校に所属していたということもあり、母校の応援ができる楽しさを感じながら取材活動を行っている。中大スポーツ新聞部は3年次で引退するので、気付けば活動ができる期間も残すところ1年を切った。今年からは編集長も務めさせてもらうので、引退をした時に後悔が残らないよう、ラストイヤーを全力で臨みたいと思う。

加えて、去年から課外活動として車いすバスケットを若者に広めるために活動をすすめるバスケットデザインカレッジ（以下PDC）という学生団体にも所属し、車いすバスケットボールの魅力を発信している。若い人に車いすバスケットを知ってもらうためにはどのような施策をするべきかなどメンバーの学生と話し合い、SNSの



1 今年の箱根駅伝沿道取材の様子 2 車いすバスケット天皇杯のブースで

是非フォローお願いします！

中スポのインスタ

PDCのインスタ



@CHUSPO_REPORT



投稿をしたり、1月20日、21日に東京体育館で行われた第48回日本車いすバスケットボール選手権大会において車いすバスケット体験会を開催したりした。

私は本格的なイベントの運営を行うのが初めてだったため、不安な気持ちで当日を迎えた。しかし、当日は予想以上の人たちに体験会を楽しんでもらえることができ、来てくださった方から「楽しかった」「また来たいです」といった温かい言葉もいただき、障がいの有無にかかわらず、多くの人が楽しむことのできるスポーツの可能性を実感した。

また、PDCでの活動でも選手にインタビューをする機会をいただいている。選手の皆さんは口をそろえて「いろんな人が車いすバスケットに触れてほしい」とおっしゃっているのです、多くの人が親しみを持てるように、そしてバスケットにもっと焦点が当たるように、これからもう一層力を入れて活動していこうと改めて思うことができました。

中大スポーツ新聞部で取材するスポーツは健常者スポーツのみということもあり、障がい者スポーツには触れる機会の少なかった私はPDCでの活動で日々新しいことに気付かされる。ここでの活動経験は各部での学びに生かせるだけでなく、今後の研究テーマなどに反映させる

文学部だより

ようこそ研究室へ！

「仏和辞書の読み比べ、楽しいですね」
授業の合間に研究室で自習していた学生が、目を輝かせて話してくれました。研究室には約25,000冊の蔵書があり、その約85%を洋書（主にフランス語）が占めています。電子化されていない貴重古書をはじめ、中世から現代までジャンルも多岐にわたり、まさに知識の宝庫です。最近では美術書や哲学書、フランス語に翻訳された日本文学等の需要も高まっています。辞書の読み比べや関連書籍の発見ができるのも、研究室ならではの光景です。

フランス語文学文化専攻には、2017年度から「語学文学文化コース」と「美術史美術館コース」の2つのコースが設置されています。語学文学文化コースでは、文学（小説、詩、言語、演劇等）や文化（映画、食、社会問題等）を幅広く学ぶことで固定概念を超えて視野を広げ、想像力を培うことができます。美術が背景となる歴史や地理を学ぶことでアートの社会的役割について考える美術館美術史コースでは、美術館見学やゼミ研修旅行などみずから体験する

ことで、より専門性を身につけることができます。どちらのコースも座学だけでなく、全員参加型のプレゼンを重視する授業が多く、学芸員資格取得やフランス内外への海外留学、インターシップへの参加等、積極的な学生も年々増えており、専攻内の活気を実感しています。

研究室には本専攻の卒業生で司書資格のある室員が2名常駐しています。2022年度はほぼ通常授業となり、演習室にも学生たちの笑い声や熱心に自習する姿が戻ってきました。授業や履修相談のほか、普段のちょっとした悩み事の相談等にも対応しています。学生と教員や担当部署をつなぐ潤滑油のような存在として、いつでも開かれたほっと安心できる場所であり続けられるよう、日々の勤務にあたっています。

フランス語文学文化研究室



こともできる。大学での学びと課外活動を別物として捉えるのではなく、融合させながら取り組むことを、これからも忘れずに活動していきたい。

私には特別ずば抜けた運動神経があるわけではないので、これからも外から支える立場としてスポーツに積極的に関

わっていききたいと思う。しかし、現時点で中大スポーツ新聞部、PDCともまだまだ知名度が低いという課題があるので、このページをきっかけに私の所属している団体について知ってもらえるとうれしい。